翁発句助辞一覧

全

生川春明著

天下遠波
ちかん知

義發自助辭一覧

好間亭蔵板

義發自助辭一覧序

てふを波のさごまりよまゝのうよいひときたとさむとせ給めう
ひまゝ兎のともゝのうハあくまゝどふめまばさ成いたりふうき
まとゞもいさしおきて此書ハたゞ義の自のことを法どくあげて
てふをハたゞぬくひまゝにびのともゞのうよまねびうつさせて
たゞへさせじとてあん山ねとうけるふしふりけるされば
このくつことりて成自どもをべおのゞよむ自どもまてらし
あそせてたゞさゞなやうよよむときハ法西ぞこのりもて

ふをいたがるぞはあるさはハ翁の名どもハあぐりゝは世
の歌文（ウタフミ）のすがたまたがるぞ是はめるさて此ふしをみ
てゝとがるさはやうまよゝはおとのふりゐが此書ハさ
しおきて後ハよりおふこそのすぢのおとむねとうける
書あまりてあまバそれらまよりてゝふをまいはべきなり
かくいふハ天保とせとらふとしの正月十日

生川ゝ作明

翁發句助辭一覧

○過去・現在・未来

たつゝかまは　狐のそり（カコ）　あゝ夜うふ
雲雀よりゝ　上ほやすゝらふ（デンザイ）　たゝげうふ
いざゆのむ（ミラン）　雪まんまおろぶ　とおろまで

○てふをも

鶴の（テニハ）巣は（テニハ）　あらしの（テニハ）かうの（テニハ）　はくら（テニハ）うふ（テニハ）
猿を（テハ）きく人　すゝふ（テニハ）は　枯の（テニハ）　風（ウヂヒ）いう（テニハ）は（テニハ）

○、のりむすびのてにをは

さむけれど二人旅寝ぞ（上のかゝり）たのもしき（下のむすび）

○体言　うごかぬ詞をいふ

ならの七重　七堂がらん　八重ざくら

○用言　うごく詞をいふ

ハ行四段　おとろはむ　おとろひ　おとろふ　おとろへ

タ行下二段　あて　あつ　あつる　あつれ

おとろひや　歯にくひあてし　海苔の砂

ハ行四段　くはむ　くひ　くふ　くへ

○現在のきれの部

現在のきれは く・し・き・け・き をきこらくと しく・しき
きれきとをきこらくとおもふは く・しき のかた

○上ゝのりふきさき

猶見たし　花にあけゆく　神の顔

月きよし　遊行のもてる　砂の上

盃すぎて　宵闇くらし　虫の聲

舟にえて　大根あらし　秋の風

花に浮世　我さけしろく　飯くろし

○よまたぞをおきてゐまてむすびこゝる

山里[た]万歳おそし　梅の花

ものいへ[ぞ]くちびるさむし　秋の風

とふぞこゝ　のさね[ぞ]こと　絹分羽

○よまもをおきてゐまてむすびこゝる

たやくさけ　帋与[も]ちろし　菓の花

垣綱の　そぐき[も]けむし　氣の柳

白菓の　風まとてくゐる　ちろ[も]ふし

○よふまをおきてゐまてむすびこゝる

あの中[ま]蒔絵うきこし　宮の月

牛部や[ま]蚊聲よまし　秋の風

菓の後　大根の花ら　さぶ[ま]ふし

○よまぞをおきてきまてむすびこゝる　きハ[ま]の轉用なり

ままとふバ　情えむ後[ぞ]あつき　秋の雨

○[ま]をたぶきこゝる

ありぐこや　雪をのをらす　市　谷

アヽガタジヤナリ

あらたふと　青葉ふわう葉ふの　月　の光
アラタフトシナリ
○　此ハしく　しき　と轉用するふり
おふじ　現在の　ふり

○上ゑのりふきゑ
うらやまし　うきゑ世のきこの　山　ちくら

○上ゑてをおきて　ゑまてむすびこる
夜るひとろ　ろつけて　うまし　いらぶい　濤

○上ゑのをおきて　ゑまてむすびこる
御ならぶの　一もと　ゆうし　梅　の　花

○ゑゑのゑりまてむすびこる　ゑ
やふぎぶり　うこま　ゑ　すじし　ゑつさい柔
へびくふと　きけ　ゑ　おそろし　きじのゑ

○ものゑりまてむすびこる
いろ〳〵の　ゑ　も　まぎらえし　ゑ　ゑの羊

○上ゑうをおきこる　ゑ
義仲の　屋ざめのやま　う　月　うふし

○ぞのゑりまてむすびこる　ゑき　ゑきハ　ゑの轉用ふり

卯の花も 毋ふさやど ぞ すはまじき
夏よりも うつくのころ ぞ このもしき
口切り さかひの庭 ぞ ふつうしき
寒うけまど こん旅屋 ぞ このもしき

○ぞのかりまてむすびたるおきのきをたぶきたる
おもしぎれ ふくく花 ぞ いそがつし

○ふげきのやをうけてきまたる花
むぐらさん 花美ふやはしや やぶまたふ

ぬまてゆく 人もをうしや 雨の花

○おそのかりまてむすびたる花けま 花けまハ花の軽用なり
えん日 ま 風毎の日 あそ あひしけま

○過去の花の部
うしの花ハけきしおると軽用するなり此花上のかりまよりてきたるなりきまざはなどふ人をて
まをしをおしぬ人のらふおとなり石のぬもおきたる
ひとし

○とまうたがひのやをおきて花まてむすびたる
梅花らし ゲザイノジナリ きのふや ウタカヒノヤナリ つはを ぬすまきし カコノジナリ

木枯ははわひやつきし（ウタカヒヤヤリ カコノシヤリ）のへりだふ

○下につぎたる過去だ

おとろひや歯はくひあてし海苔の砂（ツヾク）

二人見し雪をおもしもふりけるら

秋は何ふ ふたつはきし（ツヾク）もい葉 凡

○不のぬの部

ふのぬハずでじぬねとをさらくふり此ぬのおと

ふのぬハいへるがおとし

○たのこのうまてむすびたるだ

馬くしたたらじ たぐれの 大井川

○おふじたのこのうまてだのトにふげきのふきそへたるる

二日はもぬこのうハせじふ 花のたが

○ものこのうまてむすびたるだ

そのまゝは月もたのまじ 伊吹山

○たのこのうまてむすびたるず

ゑゑるのにたらたたらず としの暮

木つきもいねたやぶらず 友木 立

○ものゝうちにてむすびたる事

ほしおとの　みくてにもにぞ　三日の月

ゆふべにも　朝にも　つゝるぞ　うらのさゝふ

ぬにてきるべきハ翁の句ハ又あるべし
北枝の句に「ちらぬまもねばきかざ松風の
とおるぬ」あまふのぬにてきるべきなり
くハしくハ鶴林直言にいへりひらきみるべし

○下へつゞけるぬ

竹梅や　ちぬ爲つく　日すべしき

雲ゝ五番の　そろそぬ花見　おちうらふ

木曽のやせ　まだなをらぬに　あらもがへ

○おそのゝうちにてねにてむすびたる句　ねハぬの転用なり

すずらんを　餅ちいそくえね　松の花

○畢ぬの部

此ぬハおしぬぬるぬまとをさらぬなり不の
ぬハつゞく辞此ぬハきらず辞つくぬハぬるなりぬる
も上のうちよりてハきるなり　野ざらしの句「秋の
あきぬのをそぬる」来ふらの里ちいきぞのうちにてぬる
にてきるなり翁の句にハ此ぬにてきぬる
ハ又あるらず

○ぬにてきれる

うぐひすを　やしきくの　梅やふぎ

こふとさは　ゑふおしあひぬ　市迁宮
ひとつぬぎて　こしらはおひぬ　衣がへ

○あ[illegible]の部　あ[illegible]む　あり[illegible]あ[illegible]と
　　[illegible]てふり

○ものゝかりまて　あり[illegible]てきれたる
ちんとのむ　桃の木　もあり　夜木之
箒人は　あらた秋　もあり　としの暮

○けるの部　けらむ　けりけるけきと
　　ちとらくふり

○ものゝかりまて　けりまて　むすびたる
旅がらす　古巣　も　梅は　ふりはけり

○ものゝかりまて　けりまて　結びたる
月のミか　雨は　お樸　も　ふゝかけり
野ゝ宮の　鳥居は　蔦　も　ふうりけり
阿蒙陀　も　花は　来はけり　鳥はくら

○はのゝかりまて　けりまて　結びたる
ふとまた　は　別きこめけり　麻の角
杜海棠　ゐれのいろ　は　さきはけり

君比須講　酩賣[は]　もうま　きせるけり

○ふ[ふ]の郭　ふ[ふ]ばふりふ[ふ]ふ[ふ]まと
　　うゐくふり

○上まのうふ[ふ]ふり

梅うるま　むうしの下字　あハまふり

○ものうまてふりまて結びたる句

郭　頼[も]　下手のかくさへ　あたまふり

三日月の　地[も]　おびろふり　くさだだけ

○いろとふ疑ひ辞をうけてふるまてきまたる

瓜のもふ　帝[いろ]　ふる[ふ]　ますまま草

○きまだしてもつぎたるいろふる

のつを賣[いろ]ふる人を　名もすらん

○上まおこをうけてふままて結びたる句

白魚り　あたひある[おそ]　うらえふま

○たるの郭　たらむたうさるまと
　　うぶくふり

○ものうまて[ふ]ふりまて結びたる句

道のべの　木槿[も]　うまま　くもこ　たり

○もの、うりまて、とりまて結びたる句

あしぐるく　伯[も]　えんとり　花の雨

一宗　は　桂女[も]　森とり　森と風

○まの、のりまて、とりまて結びたる句

と見やらぶ　姿[は]　似　とり　と新の雲

あつき目を　海[は]　いまとり　宮上川

○下まつぐきたる、たる　きまたるたるハ　見えず

からうちは　おしまけ見たる　柳　うな

○つ虎の部　つ虎ハてつつ虎つまとたとらく　なり

○きるくつ

おくらまつ　おくりつ　たてた　木曽の桔

○てまうよふつ

観音の　いらう見やりつ　花の雲

○むの部　此部ハむめと　たるらくなり

いもあらふ女　西行　ふら　だ　うこまま　む

酒のこは　のとらむ　うた　瀧の花

起きよ〳〵 我友にせむ ぬる小蝶

菖蒲草 足にむすばむ 草鞋の緒

月花の 愚に針たてむ 寒の入

此句のたむより此むまでいづれもうごく
てにをはなり

○らしの部

痩顔に 人もあはらし その花の雪

○らふの部

樒の木の 花にかまはぬ 旅寝らふ

うぐひすの 笠おとしたる 椿らふ

陽炎の 我からにある 扇子らふ

まどゐの 木下にて 衣づくらふ

さまぐの あとおもひだす 桜らふ

○まで

舟こうで ふる別 ちる月見らふ

宿かして 名をきかぬうちする 時雨らふ

庭きまで 雪をわする ちらきらふ

おもしろうでやがてうふしき　鵜舟　うふ

○まと

菎蒻は　けふをうりのつ　菊菜　うふ

和顔は　わまをめしくふ　をとま　うふ

夏山は　是駄をおうむ　かどで　うふ

雪おとは　うつたうとるむ　住居　うふ

○まと

牡丹葉　ふかくふ出る蜂の　名称　うさ

ふげしは　羽おもく蠑の　うたんうふ

やぶつぢき　門をむぐりの　菊美ふ　うふ

○まと

麦の穂を　ちゝのぶはつのむ　別　うふ

秋の粉を　うちくづしとる　咄し　うふ

草の美ふを　おつるまりとぶ　蛍　うふ

○まと

篠の毒　袴はうけし　庵り　うふ

狗著ひとつ いのりあしたる さむさ〻ふ

○ふの部

○鞠息のふ

二日よも ぬうりハせじふ 花の裏

むざんやふ かぶとのあたの きりぐさ

年の市 線香のひり いでたやふ

○ふーの意ふるふ

あらふよともふ（ナシ）きのふもすぎて ふくと汁

蛍 尼や 舩 人醉て おがつかふ（ナシ）

○舩のあるふるふ

うたがふふ（ヘナカレ） 俗のたふも 俗の裏

秋よ例ふ（ルヘナカレ） ニッよわ乗し さら乗仇

枕のふの その美ふちらすふ（ヘナカレ） 枕の風

○ふ〻そ〻ふ

首よあそぶ 蛇ふくらひそ 友すごめ

救ふらぬ 身ふおもひそ 丑まつり

けらづきは　泥ふおとしそ　封つぞめ

○おふじふをもぶきとる句

あ川の　あは□（さゝはふのかなあるへきなり）　おむきそ　女　花

○下知の部

○けせてへめき

塚もうむけ（カ行四段活言）　我ふくたりは　秋の風

子供らよ　梅きり（サ行四段活言）　のむせ　牛のむち

納豆きる　青花だしまて（タ行四段活言）　鉢とき

うきんの　旅はもふらん（ハ行四段活言）　木曽の蝿

ほすまずば　小物の中山　まてすじめ（マ行四段活言）

夫よりて　花いまさぐま（ラ行四段活言）　梅つぞき

○よをえくとる下知

此あしろ　推せよ　花り　丘畨一貝

箕虫の　青をきくまおよ　草の庵

旅人の　あらはもおよ　椎の花

月さびよ　明智がつまの　もふしせん

山るの うぶしけつげよ トコロあり
蝙蝠もいでよ うき世の 籠り鳥
鎖あけて 月さしいまよ 浮御堂

○

○やまうよふよ おろうまいふのこまのやの格ふり このまちで 欲長
冬牡丹 千鳥よ ゆきの あとぞ
あるもせぬ 旅寐のまくよ 秋のくま
稲妻り さとらぬひとの こゝやさよ

○おぶじよ きたぶきこうとおぶしきる
ひる顔に ひ体寐せうね 床の山

○う の部

○うてがひきるく う
うぐひすを 魂にねむるう 嬌やゝふぎ
義仲の 寐ざめのやまう 月このあし
ほうくを 山吹ちぶう こきの音

○おぶじうをうさねてる句

花の雲　鐘は上野　ゟ　俳草　ゟ

○ゟふの意のゟ

雪と申き　くて霄師走の　名月　ゟ

○

○たの部

○うぶかぬ訪て　佐ぶた

菓ないぐ　奈ふると　難波　た　鳥月朔

ふらずとも　升くゝ　た　義を笑

人は恵を　のたせて　我　た　とし一手見

名月　た　ふとうあッても　勢国の橋

○だをうさねとる

見ることせ　だ　志がむ見　だ　見見　だ　頃麿の枋

○もの部

うらざけ　も　くゝやのやせ　も　寒の市

青くて　も　あ所べきおを　庵のうし

○の、部

○うぶかぬ詞まて侍ぶの

かそそふ　杖り　白髪の　たうまゐり

梅　安菜　まりおの　宿の　とろ汁

宋くるく　夜きら　雪の　月の　客

○ぞの部

○うぶかぬ詞まてむすぶぞ

草の戸も　住うたは　世ぞ　雛の　泉

○卩まむすびあるぞ

卵の花も　母ふき　宿ぞ　すきまじき

蓑よりも　うくのとう　ぞ　とのもしき

手まとらば　惜む原ぞ　つらき　秋の　おね

○いひのくはぞ　きるぞふり

吉野まて　採ふ　せう　ぞ　捨木がき

○うとゞひてとひかくるぞ　あまもきるぞふり

秋ふかき　とふりハふまを　すは人ぞ

○うとゞひてとひかくるぞ　きたぶきとるる

雲の峯　いくつぐまとし　月の山□
大津絵の　筆のそじめを　ふま仏□
十六相の　いづきうそ　絵り　のまぶ菓□
こまく人う　おもきています□　花　のまい

○やの部

うさぎのひのや　ふげきのや　ふぶめのや　願ひのや　ふぞくさぐあり
てきるもありつぐくもありさるきその世ハこでやとぞまいへ
ぞきるさはとくまいろへたる人すくふこのらずいとせさこふく
あらへたるおとふり

○下ま絵びある　疑ひのや

木がらしま　ふあひ　やつきし　うへり　花
れもしろし　雪ま　やふらむ　冬の雨
あれらしき　ふ　や　小松ふく　萩すき
破風ひり　ほうげ　やよわる　夕すごろん

○おおじ疑ひのやきうさねたる

たつまくわ　こでま　やわらむ　わま　やせむ

○こぶらぬ詞まて　絵びたるや

松松を　ほめて　や　風の　うきは　音

ふき人の小袖もいま[や] 志用子
稲すじめ 茶の木細[や] まげぎのら
きりくま 伊物を見て[や] 各ぎぎり
五月雨の ふりのおして[や] ひのり堂
七株の 薪のてもと[や] おしの枯

○結び詞の格をうべてとゝけたる句
夜ゝの月の いまや[や] くれぬと ふくうぐら

○いひ付て 結びたる疑ひのや

早苗とる あもと[や] むかし 志のぶずり
紫の戸の 月[や] そのまく 阿弥陀房
こゝとこの所 洞[や] そめてく 志原 孝美
とものくも ふらで[や] ゆき(ユク)の 枯尾花
住つらぬ こびのおらら[や] おきざらら(オク)

○結び詞をたぶきたる疑ひのや
石の者[や](スラム) 夜 草 あくのく 春あつし
後おし[や](スラム) 雨縁脛 ぬまてく 梅すぐし

高ねり　星も弦屋や　スラム　山石　のと

○きるく疑ひのや

うづゝ火も　きゆや　ふゝぶの　まゆるおと

すぐりくや　ひらふや　くぼき　いしの家

○鞠息のや　きるゝや　ふり　・ざといふ詞よりこけるや

不性さや　うきあはさまし　まの　雨

あづかさや　山石よりしいふ　蟬のなし

さびしさや　花のあとりの　あすふらふ

○現在の者よりこけるや

めづらしや　山をいでね　の　初茄子

物布しや　袋のうちの　月と花

○まこ才七字まてきまこるおふじや

むぐらさへ　あるふやさしや　やしぶまふ

ぬまてゆく　人もをうしや　雨の森

むろくを　粉　あけしや　女良花

○きるく詞よりこけるや

須磨の蜃の　やさきとよふく　や　あせしぎれ
ひとさむ名の　江よよむとふ　や　ほせしぎす
秋ちらき　むらの上に　や　四五十
○まて
ひと里ゟ　ゑふたふるの　子孫ら　や
むざむ　や　ぶ　うぶせの　たしの　きりぐす
○まて
揺ぶり　きどく　や　月ぐ又　五里六里

とむ見りと　あふち　や　あめの　花ぐもり
風流の　たじめ　や　おくの　田ら名こと
○まて
むき飯に　やつ成くむひ　や　猫の妻
くらびきて　やどの成むら　や　菊の花
五月雨に　うくまぬね　や　勢田の橋
川上と　此川　たも　や　月の友
・不性さや・より　むきまでいづまも歓息の
やふり

○ふがめのや

としぐ[や] 猿にきせたる さ雨の雨

うぐひす[や] 餅にふんする 掾のさき

六月[や] 嶺にくもおく あらし山

○まて

大日投[や] 春をひきすてし ひとうすと

古池[や] 蛙とびこむ 水の音

五月雨[や] 色帋へぎたる 雲の跡

○まて

うぐひす[や] 柳のうしろ 籠の苔

ゆくまい[や] 鳴る啼る 月をふえぐ

稿書[や] うれのとまろが すきの穂

○まて

神がき[や] おもひもうけず。 涅槃像

ち雨花[や] 鳴るもおどろく。 琴のちり

釈がれ[や] ひるハ。鎖おろす。 門の垣

○まゝ

かまさせ[や]まごのげろ山の一二寸

卯の花[や]くらき柳の及ばし

さゞ浪[や]風のうわりの右柏子

せしぐやより さゞ浪やまでふぶめのや

ふり

○だゞだゞもこつゞく調よりうけたるや

まゝふき[や]ゑもふき山の鶏がすゝ

尺ぜむろの あき[や]野分の後の菓

○えりいでしるや

月花の あき[や]まむとの あるじしら

○柏子のや

ねせぎす ふく[や]五尺の あやめ草

菓の花 さく[や]石屋の石の間

○願ひのだや

秋にそうて ゆうだ[や]す君ハ小松川

其方を 尺だ[や]枯木の 枝のうけ

まもり居て　木の実草の実　拾はだ　や

三升なるの　門　ことうだ　や　けふの月

○やとおきてうふととめたる句　やハふぐめのやふりうふの　のうりまあらず

夕顔　や　秋もいろくの　ふくべうふ

○何の部

○うぶかぬ詞まてもすぶふま

薬園の　いづま　のたふを　草まくら

初雪　や　いつ　大佛の　たしらぶそ

○下ま結びあるふま

山　秋も　ふま　、せしよる　雲まる

ゆく末も　さぶ　たぶふまむ　の花

うつをうり　いう　ふるひとう　ゑたすらむ

○うくぶひてとひのくるふま

まよひ　とま　老鄙の月も　十六里

猿をきく人　拾ふりあきの　風　いう　ま

○いひうけまて結びたるふま

和和さを　たま　まり鳩の　のこざろ

○おその部

○下まむすびあはあそ

え日　り　田ざいとの日　あそ　庭しらき

白　名り　價ひあは　あそ　うゝえふま

まずらへば　餅　あそ　くそね　梅の花

○いひうけまて結びこるあそ

さまバ　あそ　あまこきまくの　あの宿

○

○下まむろをむめこる句

蛎　よりハ　海苔をバおいの　うゝもせで

庵　晴の　松はたたふより　おがろまて

いざはらバ　雪ゑまあろぶ　とむろまで

○とまりよりよへへ　へ　は句

いざはうむ　雪ゑまあろぶ　とむろまで

年くれぬ　ふきて章　難　たきふがら

やどうせん 藥の技り ふ所日まで

○きるゝときいろあきこる

四ヶ方より 花ふきらまて 鳴の海

宮木の 松のふゝより 初 橘

猫のまひ やむとき国の おぼろ月

柚の花に むらしを忍ふ 料理の間

翁發句助辭一覧 畢